



# 見えない顔



薫風さつき

刃を向ける。

表情一つ変えない魔物を切り捨てる。ドット絵で描かれた平面上の魔物は、あっけなく倒された。

バーチャルが近付いてきた。

映像はより鮮明に、そして、リアルになった。魔物は声を上げるようになり、表情も豊かになった。さらに、質感も本物と見間違える程だ。こうして我々は、より臨場感のある戦闘を楽しむ事ができるようになったのだ。

繋がりが生まれた。

携帯電話も次々と進化を遂げ、現在地を知らせたり、写真付きで言葉を公開したりすることができるようになった。どこにいても人と繋がり、協力や共有できる。素敵な時代になったものだ。

一目が疲れることは否めないが。

苦痛を感じなくなった。

例えば、電車の待ち時間。携帯で友人の独り言を見て、突っ込みを送る。そうこうしている間に時間は過ぎ、乗るべき電車はやってきているのだ。

電車に乗り込むと、中には携帯ゲーム機や携帯電話と睨めっこをする人が詰まっている。その瞬間、私は孤独を感じる。しかし、何の問題も無い。友人達の独り言の飛び交う世界に再び入れれば良いのだ。

声が見えるようになった。

独り言の世界では、友人達が普段は表せない心の声を見せてくれるのだ。私も、音にしづらい心の内を送り返すことができる。友人を少しは支えることができただろうか。どんな悩みでもいい、私に見せて欲しい。

大きな事件があったらしい。

ニュースで話題になった。悪事を働いたものは、我々、独り言の世界の住人たちの力によって、あっという間に特定された。さすがである。我々の力をもってすれば、悪はこの通りだ。

大きなイベントがあるらしい。

一人の小さな独り言を、一人ひとりが広めていく。そうして集まった何十万という数。大丈夫、独りじゃない。繋がっているのだから。私がここまで誰かと繋がれたことが、今まであっただろうか。

近くで事件があったらしい。

「男は刃物を持って逃走中。」そんな情報が飛び込んでくる。なんと頼もしいことだろう。おかげで、出かけ先で気を付けることができる。人の繋がり感謝しない日は無い。

今日も苦痛の無い時間であった。

満員電車の中で孤独な私は、幅広い人脈と豊富な情報、絶え間ない交流の中で過ごし、あっという間に目的地に着いた。

階段を上る間も、独り言の世界での交流は続く。階段を上るという苦痛すらも感じない。階段を上りきり、一息ついてゆっくりと液晶画面を眺める。今日もありがとうと感謝しながら。

その時、後ろから誰かにぶつかられ、舌打ちをされた。もっと、心を広く持てないのだろうか。すかさず私は、愚痴を打ち込んだ。

こうして私は心を満たす。

ここには温かな仲間が居る。

刃を向ける。

表情一つ変えずに切りつける。階段の上に立ちはだかった門番は、あっけなく崩れた。

バーチャルへ近付いていった。

目に映る景色は鮮明で、やはりリアルであった。響き渡る声を上げ、表情も豊かだった。いつもと違うのは、感触と温度があったことぐらいだろうか。

一体感が生まれた。

僕の周りでは、シャッター音が響いていた。そして、現在地の情報と共にその写真を共有するのだろう。さっきまで満員電車で孤独だったその人たちは、やっと一つになることができたのだ。

—お互い、目を合わせることは一度も無かったが。

苦痛は感じなかった。

これだけの時代になったのだ。当然の事だ。それだというのに、彼は一体どうしたのだろうか。痛い痛いと言った顔なんかをして。

大きな話題になったらしい。

早くも話題になった。大きな行動を起こしたのは、我々、独り言の世界の住人たちの力によって、あっという間に拡散された。さすがである。彼らの力をもってすれば、この通りだ。

大きな人気にもなったらしい。

一人の小さな独り言を、一人ひとりが広めていく。そうして広まった何十万と言う数。大丈夫、独りじゃない。繋がっているのだから。私がここまで人気になれたことが、かつてあっただろうか。

余計な話題もあるらしい。

「男は刃物を持って逃走中。」そんな情報が飛び込んでくる。なんてことをするのだろう。おかげで、出かけ先で気を付けなければならない。中途な正義感ほど疎ましいものは無い。

理解のできない時間が終わった。

今いる世界で孤独な僕は、幅広い人脈と豊富な情報、絶え間ない罵倒の外で過ごし、あっという間に目的地に着いた。

ようやく僕は現実に気付く。

人には顔があったのだ。

## あとがき

---

作品にお付き合い下さり、ありがとうございました。

ここでは、一つ注意をさせていただきたいと思います。

この作品の中では、ゲームや携帯電話などを登場させています。その登場のさせ方のために、それらに対する批判や皮肉りをしているように感じてしまう方もいるのではないかと思います。

しかし、この作品の中では、何かを批判したり皮肉ったりするという意図は全くありません。どうかご理解ください。

強いて言うならば「人とのかかわりの中で、何を見ているか」ということを意識して書いた文章です。

あまり多くを書いてしまうと、余計なお世話になってしまうので、あとは読んで下さった方の感想に委ねたいと思います。

今後とも、他の作品に興味を持っていただければ幸いです。

薫風さつき